

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 24 日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770008

研究課題名(和文)アウグスティヌスDe musicaへと繋がるムーシケー概念の歴史的展開

研究課題名(英文)Historic development of the Mousike to Augustine's "De musica"

研究代表者

小川 彩子(Ogawa, Ayako)

学習院大学・文学部・講師

研究者番号：10726582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：musicの語源であるラテン語のmusicaおよび、さらにその語源である古典ラテン語のムーシケーの語義的変遷を調べることによって、いかにして古典ラテン語のムーシケーという語が音楽の意味に収斂していくのかを調べるのが、本研究の趣旨である。まず、古典ギリシア語のムーシケーには、原義的に「神の言葉を伝えるもの」という意味があることをプラトンの読解から明らかにした。そのうえで、アウグスティヌス『音楽論』においてmusicaの意味がかなり限定されることを捉え、後期アウグスティヌスにおいて「神の言葉を伝えるもの」が音楽に他ならなかったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I researched how a word of mousike converges to a meaning of the music. The etymology of music is musica of the Latin. Furthermore, the etymology of musica is mousike of Classical Greek.

At first, I made clear that a word of the Classical Greek "mousike" have a etymological meaning of "a thing delivering words of God" in Plato through reading and understanding the Plato's texts. Especially, in "Phaedo", this etymological character appear vividly. But, in Augustine, I caught that a meaning of musica was considerably limited and clarified that "the thing delivering words of God" was nothing but music in latter Augustine.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 古代ギリシア哲学 音楽 美学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初において、古典ギリシア・ラテン文献研究において musica およびその語源ともいえる「ムーシケー」概念研究は、決して焦点を当られたものではなかった。従来の研究においては、古典文化における実際の音楽研究が中心となっており、例えば古典ギリシア文献の中に登場する「音楽」の具体的な様相について検討するものであったり、もしくは、当時の音楽にはどのような楽器が用いられていたのか、あるいは、どのような形式の音楽が奏でられていたのか等を検討する内容の研究がほとんどであった。

例えば古典ギリシア悲劇においては、キタラーやアウロス笛が用いられていたことなど、具体的な音楽の再現を試みるものや、当時の音階がどのように成り立っていたのかなどを読み解く研究も目にした。確かに、アリストクセノスの『ハルモニア言論』などから、当時の音階解釈を明らかにし、ピュタゴラス音階のような比率頼りの音階から、時代が進むにつれて平均律の発想が生まれてきたことなどは、音楽研究においてきわめて重要なモニュメントであり、そのような様子からも音楽の価値が、数学的な比率を重視した学問から、次第に平均値を聞き分ける耳という感覚器官に頼ったものとなっていくという変遷を見出すことも可能であるだろう。

(2) しかし、なぜ、そのような音芸術が musica やムーシケーという語で呼ばれる一方で、そのほかの詩作全般や広く文芸一般、はたまた舞踊や数学や天文学なども同じ musica やムーシケーという呼び名で呼ばれているのかの理由については検討されることがなかった。確かに、上記の音階解釈からも明らかのように、「音楽」には、感覚的に「音」を捉える営みと同時に、比率的で数学的な側面がある。とはいえ、数学も天文学も音楽も、一つの「musica」や「ムーシケー」という言葉でひとくくりにされているのは、どうしてなのだろうか。そのことに関する研究は、特に進んでいないように論者には考えられた。また、過去にも同様の内容で進められた研究も無いわけではなかったが、研究結果として大いに納得のいく結論を示したものはこれまでに見ることは無かったと言っても過言ではない。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、4世紀を生きたアウグスティヌスの De Musica すなわち『音楽論』における musica の概念を明らかにすることにある。というのも、アウグスティヌスの『音楽論』はとても奇妙な著作だからである。というのも、『音楽論』という表題にもかかわらず、この著作ではほとんど「音楽」らしきことに関しては語られていないからである。全6巻からなるこの著作は、第1巻から第5巻までは韻律論と言っても過言で

はない。第6巻は少し特殊で、それまでの巻とは内容が異なり、それまでの巻の全体を総括するような構成となっている。また、今までの韻律論とは別に、神へと繋がる魂のリズムについても論じていくことになる。はじめは感覚器官における耳に届くような外側に響くリズムについて論じているのだが、次第に理性によって捉えられる魂のリズムの問題へと展開していく。

しかしながら、全体を通して『音楽論』で語られている内容が「音楽」にまつわるものであるとは考え難い。どちらかといえば、第1巻から第5巻までは韻律論、第6巻はリズム論やそのリズムを構成するところの数を扱った数論と言った方が適切であるような内容である。確かに、歴史的に見てもムーシケーという語の有する意味内容は幅広い。しかしながら、ここでなぜアウグスティヌスは敢えて musica という語を用いたのかは、非常に重要な問題である。アウグスティヌスの中で musica 概念がどのように成立していったのかを検討することが、本研究の最終的な目的である。

(2) アウグスティヌスの『音楽論』はその表題が『音楽論』であるにもかかわらず、決して「音楽」について論じているわけではない。第1巻から第5巻までのまとまりの中で語られている内容は上述のように韻律論であるが、第6巻で語られている内容は、韻律に端を発してはいるもの、決してそこに収まりきるものではない。musica の語源は古代ギリシア語の「ムーシケー」であり、ムーシケーの翻訳語がラテン語の musica に他ならないが、そもそもムーシケーという語の意味は幅広く、もともとムーサの女神たちが司る営み全般を示していた。例えば、叙事詩、歴史、合唱、舞踊、天文学などである。つまり、それらをすべてムーシケーという語でひとくくりにすることができたのである。しかし、徐々に概念の意味に変遷が生じ、いつしか music は歴史や舞踊や天文学を指し示すことはなくなり、「音芸術」という意味に収束していくのである。その意味の収束が極端に表れている例が、アウグスティヌスの『音楽論』なのではないかと一つの予想を立てて、そこまでのムーシケーおよび musica の意味の変遷を検討することを本研究の課題とした。

『音楽論』第6巻で論じられている musica 概念は、決して韻律にとどまるものではないが、明らかに古代ギリシア語のムーシケーよりも先鋭化されて限定された意味となっている。その意味の収斂がどのようになされているのかを検討することが目的である。また、韻律論やリズム論を称してなぜ『音楽論』と名付けたのか、という部分にも、アウグスティヌスにとっての musica の意味付けが関係しているはずである。

(3) したがって、アウグスティヌスに至るまでの古典ギリシア語文献におけるムーシケー概念の意味を明らかにすることも本研

究の大きな目的である。確かに、表面上は、歴史や叙事詩などの文学的要素、合唱や舞踊などの演劇的要素、天文学などの数学的要素を含み持つものとしてムーシケーが扱われている。だが、これらの仕事には根底に何か共通性があるのかもしれない。もちろん、これらすべてはムーサの女神たちの恩恵である。しかし、そうした神話的な解釈だけでなく、何かもっと別に語義的な共通性がないものか検討することが本研究においては重要である。そして、ムーシケーの語義的特徴が、アウグスティヌスの musica 概念にもつながっていると仮定したうえで、にもかかわらず、表面上の musica の外延関係に変化が生じる理由を明らかにしたいと考えている。

### 3. 研究の方法

(1) 具体的な研究方法としては、ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』、ヘシオドス『神統記』から始まり、プラトン『ソクラテスの弁明』『クリトン』『イオン』『パイドン』『国家』、アリストテレス『詩学』『政治学』『弁論術』、アウグスティヌス『秩序論』『音楽論』などのテキスト読解から、ムーシケーおよび、ムーシケー概念に関連するところの周辺概念、すなわち「詩作」「韻律」「リズム」などの概念がテキスト内でいかに扱われているのかを検討した。そうすることによって、ムーシケー概念がそれぞれのテキスト内でどのような意味の概念として捉えられていたのかが浮き彫りになるとともに、語義の歴史の変遷を見ることができからである。そこで、まずはウェブ上の Peruseus Digital Library において、当該の単語の使用が認められるテキストを確定し、その頻出度やテキスト内における文脈のチェックを行った。上記のテキストは、本研究のメインとなるものであり、それ以外のテキストに関してできる限り調べた。

(2) まず、ホメロスやヘシオドスらの叙事詩における「ムーシケー」概念は、全体として、「ムーサの女神たちの司る技」という意味に終始し、女神たちの司る技が何であるかに関しては、ヘシオドス『神統記』に記載されている通りである。しかしながら、この時点での「ムーシケー」概念の外延に含まれる範囲は極めて幅広く、それぞれの技に見られる連関関係を把握することは難しい。そこで、時代を進めて、プラトンやアリストテレスなどの哲学書において、いかに「ムーシケー」概念が扱われているかということ、学問を下地としたテキスト内で検討する必要が生じてくることになる。

(3) しかしながら、もちろんのこと、プラトンやアリストテレスにおいて、ムーシケーが何であるかということが明記されているわけではない。アリストテレスの著作においては、全体として、いわゆる「音」に関する行為を指していると言える。厳密に言えば、

音とリズムとハーモニーを有する、いわゆる「音楽」の意味で用いられている。逆に、プラトンにおいては、ムーシケーという単語はアリストテレスよりも頻出し、アリストテレスよりも含み持つ意味の幅の広いものとして扱われていることが、一見してわかる。そこで、プラトンのムーシケー概念を丹念に検討することが必要となる。

(4) さらに時代を進めて、肝心のアウグスティヌスにいたっては、前期と後期において musica 概念に、明らかに意味の変容が見られた。したがって、前期の作品と後期の作品との比較を通して、アウグスティヌスの中でどのような変化があったのかをくみ取らなければならない。そこで、前期の作品からは『秩序論』を後期の作品としては『音楽論』の特に第6巻を重点的に比較していく方法をとった。

### 4. 研究成果

(1) まず、ホメロスやヘシオドスらの叙事詩においては、ムーシケーは全体として「ムーサの女神たちの司る技」という意味であった。ヘシオドスにおいては、具体的にムーサがどのような女神たちで構成されているのかについての言及があるが、それによればムーサたちは9人で構成されており、彼女たちの司る技術は、叙事詩や歴史、抒情詩、悲劇、喜劇、合唱・舞踊、天文と幅広い。また、ムーサの女神たちを指揮するのがアポロンであることも述べられている。さらに、ホメロスに代表される叙事詩は大概、ムーサの女神たちへの呼びかけにより開始される。『ホメロス風讃歌』の中にはムーサの女神たちに捧げるものもある。これら叙事詩や讃歌は全体として「ムーシケー」と呼ばれるものであることを、作品全体で表示しているともいえる。

(2) 次に、プラトンの作品に目を移すと、ここでもやはり叙事詩などの文芸が「ムーシケー」と呼ばれていることがわかる。特に『国家』においては、ムーシケーによる教育について論じられている。ここでは、体育教育と対比的にムーシケー教育が語られているが、いわゆる韻律を伴う「詩作」による教育について論じられている。しかし、『パイドン』において一つの疑問が生じる。それはかの有名な「ムーシケーをなし、それを仕事とせよ」という一節である。これは、ソクラテスが処刑を待つ中で夢のお告げの言葉である。この言葉を受けたソクラテスは、ムーシケーが一体何の意味なのか「わからない」という状況に追いやられる。それは、ムーシケーが、一般にいう「詩作」のことなのか、はたまた人生をかけてなしてきたところの「哲学」のことであるのか「わからない」という意味である。この一節に端を発して、プラトンの描くソクラテスにとってのムーシケーが何であるのかを再検討してみた。つまるところ、

「ムーシケー」は「詩作」のみならず「哲学」をも含み持つ概念であるということがまずいえるだろう。でなければ、ムーシケーの意味が「わからない」ということはないはずだからである。しかし、広い意味で文芸全般としてムーシケーを捉えたとしても、韻律のある詩作と、そうではない哲学、また、ムーサの女神の技とも言い難い哲学を一つの単語で示そうというのは、かなり乱暴なようにも見える。そこで、一体ソクラテスの中で何が生じていたのかを明らかにするために、今一度プラトンの著作読解を進めた。ホメロス語りを論じた『イオン』では、詩人の様子を「神がかり」や「信託を告げる者」という風に表現するところがある。「詩作」は神意や神の言葉を伝えるものとして、まさに「ムーサの技」として捉えられていることがわかる。さらに、『ソクラテスの弁明』などで描かれているソクラテスがなしてきたところの「哲学」は、振り返れば「ソクラテス以上の賢者あるやなしや」という一つの神託の真偽を見極めるための営みであった。神託の内容を吟味する営みの中で、ソクラテスは人間が知りうるのはあくまでも「人間並みの知恵」であり、善美のことについては神以外知りえないということを示している。それは、神がソクラテスの行いを通して「人間並みの知恵」が何であるのかを、我々に伝えようとしているのだともいえる。結局、ソクラテスにとっての「哲学」は「神の言葉を伝えるもの」であり、こうして見るならば、「詩作」も「哲学」もソクラテスにとっては「神の言葉を伝えるもの」として共通の特性を有したものであったのである。

(3)ところで、アウグスティヌスの『音楽論』は全体として韻律やリズム、それらの背後に潜む数を扱った内容であるが、それらを論じる著作の表題を『音楽論』と名付けたのにはどのような理由があったのだろうか。アウグスティヌス前期の作品であるところの『秩序論』では、いわゆる自由七科について論じられているが、「音楽」は一種の学問の階梯の中間に位置し、「感覚と知性とに与る学問」と述べられ、感覚によって捉えることのできる領域の限界に位置するような学問として扱われていた。ところで、アウグスティヌスの著作は前期と後期とでは明らかに変化を持っており、そこにはアウグスティヌス自身の宗教的態度の変化が原因としてあるのだと考えられた。ちょうど、『音楽論』は第1巻から第5巻までのまとめりと、第6巻との執筆年代に開きがあり、第6巻は宗教的態度への変化がある中で、加筆修正を行って現在の形に仕上がっていると考えられている。そのような中、『音楽論』第6巻で論じられているものは、『秩序論』で語られた感覚によって限界づけられている「音楽」とは明らかに異なったものであった。『音楽論』第6巻で、アウグスティヌスは音楽におけるリズムを手掛かりに、英知的な知識にまで到達しよ

うと目指しているのである。これはいわば、『秩序論』において七つの学科で学問の階梯を徐々に段階的に上っていき、最後に哲学にたどり着くという流れを、『音楽論』において「音楽」という一つの学科の学科の中で、学問的な上昇を目指そうとしたということである。アウグスティヌスは『音楽論』において、「音楽とはよく拍子づけることの知識である」と定義しているが、その拍子づけは、決して感覚的なものにとどまらず、ひいては「哲学」に匹敵するような、世界の秩序や神を認識することに繋がるものとして扱われていたのである。

(4)以上のように、歴史的にムーシケーおよび musica 概念を見ていくと、一つの仮説を立てることができよう。それは、プラトンのムーシケー概念が顕著に示している通り、ムーシケーとは元来「神の言葉を伝えるもの」であるということである。ホメロスやヘシオドスの作品は全体としてムーシケーとして語られ、ムーサの女神たちに支えられて語られているという構造を有しているが、これもまた「神の言葉を伝えるもの」であるといえよう。また、アウグスティヌスにとっての「音楽」は最初は自由七科における中間的な段階の学問として、感覚と知性とに与る学問だと語られていたが、蓋を開けてみれば、音楽は決して耳を楽しませるためのものではなく、我々に世界の秩序や神の存在を明らかにする、いわば「哲学」をも含み持つものとして扱われていることがわかった。音楽はよく拍子づけることの知識であるとともに、その拍子づけは次第に私たちの感覚から理性へと向きを変え、私たちの理性に神の存在を伝えるものとなる。これもまた全能なる「神の言葉を伝えるもの」である。アウグスティヌスにとってキリスト教はあまりにも偉大な信仰であったのだろうし、彼の生きた時代はまさにキリスト教の時代である。こうした社会的な背景とともに、musicaの担う意義が宗教的なものへと変容したともいえるが、とにかく、歴史的な変遷の中で常に共通しているのはムーシケーおよび musica が「神の言葉を伝えるもの」として働いているということである。つまり、時代によっては「神の言葉を伝えるもの」が叙事詩だったり、合唱や舞踊だったり、天文学だったりしたのである。それが、たまたまプラトンにとっては哲学であり、アウグスティヌスにとっては讃美歌であり、時代によって「神の言葉を伝える」媒体が異なるということなのではないだろうか。ムーシケーは最初とても意味内容の広い概念であったが、次第に音芸術としての「音楽」に意味が収斂していく。その変遷には、「神の言葉を伝えるもの」としての媒体の変化があるのではないかと、という結論が本研究の明らかにした内容である。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

小川彩子、「ソクラテスとムーシケー」、  
学習院大学『研究年報』第63輯、査読無、  
pp1-26、平成29年。

小川彩子、「哲学としての音学 アウグス  
ティヌスにおける音楽(musica)の意味」、  
上野学園大学・同短期大学部研究紀要『上  
野学園創立110周年記念論文集』、査読有、  
pp33-47、平成27年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小川 彩子 (OGAWA, Ayako)

学習院大学・文学部哲学科・助教

研究者番号 : 10726582